

モンゴル国ヘンティ県 石造文化財調査

国際遺跡研究室および保存修復科学研究室では、文化遺産国際協力コンソーシアムより支援要請を受け、2009年8月にモンゴル国のセルベン・ハールガ遺跡とアラシャーン・ハダ遺跡において石造文化財の調査を実施しました。

広大な草原の中に並んだ岩山の一つにセルベン・ハールガ遺跡は存在します。岩山の斜面上、無数に存在する花崗岩の巨岩群の一つに女真文字の銘文、他の一つに漢字の銘文が刻まれており、共に若き日のチンギス・ハンも参戦した戦の武勲が記されています。また、アラシャーン・ハダ遺跡は草原の中に残された砂岩・凝灰岩の露頭に存在します。岩壁の至るところに岩画や、様々な文字で刻まれた銘文が多数存在しており、同遺跡一帯には、未知の銘文が眠っている可能性があるといわれています。

今回の調査では、銘文が刻まれた石材の材質に関する調査や劣化状態の調査に加え、遺跡を取り巻く環境に関する基礎的な調査をおこないました。今回実施した調査結果を受けて、来年度以降はさらに詳細な調査をおこなう予定です。そしてモンゴル側の専門家と共同で、これらの調査や将来的に実施する遺跡の保存修理を実施する事で、モンゴル国に対する技術支援もおこなっていく予定です。

両遺跡が存在するヘンティ県は、チンギス・ハンの故郷としてモンゴル人にとって特別な意味を持つ地です。貴重な遺跡での保存修理を通して、モンゴル国の文化遺産保全への一助となれば幸いです。

(埋蔵文化財センター 脇谷 草一郎
企画調整部 田村 朋美)



アラシャーン・ハダ遺跡調査時のキャンプ地にて

平城宮東院庭園で観月会

9月26日(土)平城宮東院庭園で、奈良文化財研究所、平城遷都1300年記念事業協会(以下、「記念事業協会」)、奈良県、奈良市等が共に主催者となり、観月会をおこないました。

平城宮東院庭園が今年7月に名勝指定されたことについては既にお知らせしたところですが、一般公開されてから10年余り、今回のようなイベントが開催されたのは初めてでした。かねてよりこの古代宮廷庭園を有効に活用したいと考えていた研究所が記念事業協会に呼びかけたところ、快く賛同を得ることができ、文化庁の後援も受けて、遷都1300年祭100日前イベントとして実現したものです。100名限定の一般参加抽選には2,000名を超える応募があり、人々の関心や期待の高さを知るところとなりました。

当日は天候に恵まれ、きれいな夕日が沈むころに開場、天平茶や古代のお菓子をふるまいながら参加者を迎え入れました。そしてあたりが夕闇に包まれた午後6時、池の中央に浮かぶ復原建物は、月明かりと燈火に照らされて、幻想的な舞台に変わりました。

仲川奈良市長、玉井文化庁長官および奥野誠亮記念事業協会特別顧問の主催者挨拶の後、「天平の宴」として篠笛、尺八、小鼓の演奏が響く中をミス奈良や研究所の職員ら14名がモデルとなって天平衣装を華麗に披露しました。

後半はオカリナ奏者の宗次郎氏が、この日のために作ったオリジナル曲など数曲を奏で、観客たちは古代宮廷の世界のひとときをこころゆくまで楽しみ、盛況のうちに終演となりました。

このたびの試みを参考にして、来たる遷都1300年祭、そしてその後の活用を考えていきたいものです。

(管理部 永井 あつ子)



中央建物で、プログラム「天平の宴」